

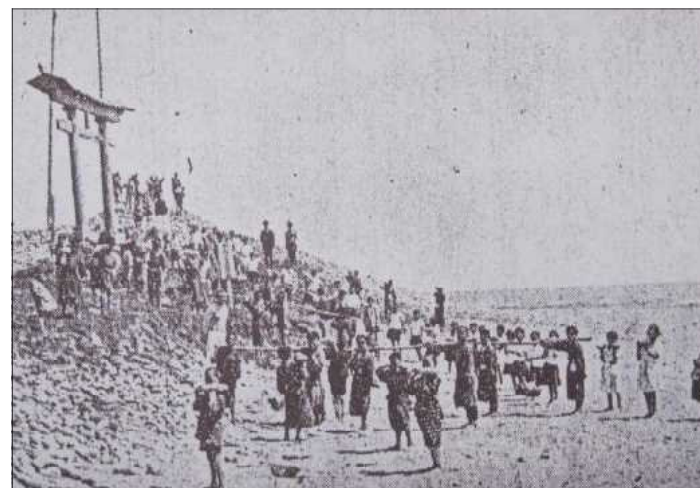
我らの波止



少年俱樂部表紙（昭和7年新年特大号）



飯岡海岸護岸工事竣工記念モニュメント『波止』



昭和6年5月20日の波止と作業風景

我らの波止

昭和七年「少年倶楽部」新年特大號學校美談
中村六三郎（飯岡小学校第二四代校長鈴木保司）著

一 波に削られる陸地

関東地方の地図を御覽いただくと、九十九里浜の東岸に、心持ふくらんだ所が見えます。これは竜王岬と呼ぶ小さな岬で、ここに飯岡町があるのです。御承知のように、九十九里浜は荒海で、激しい波により、年々付近の陸地は削られているのです。

昭和五年十二月、満潮につれて飯岡海岸の海水はふだんよりもぐっとふえて、どんどん町の中に侵入してきました。町の人たちの不安は並大抵ではありません。消防隊、青年団は総出で海岸線を夜通し警備しました。幸いに海に近い十数件の床下を濡らしただけで、夜明け近くに海水は引きましたが、その夜の恐ろしさは、たとえようもありません。

翌日、銚子測候所の発表では、「千葉・茨城一帯の海岸は、二尺ほど海面が上昇した。原因は不明だが、太平洋のどこかで、大地震があつたのかもしれない」ということでした。

さて、その恐ろしいできごとがあつて間もなく、この不安な海岸に出て、十二月の寒風にさらされながら、散らばっている石を集めて、こわれた岸に積みあげている二人の少年がありました。若松福松君と丸山庄一君で、二人は飯岡小学校の六年生でした。

「おい、丸山君ぼくは三十運んだよ」

「ぼくもあと二つで三十だ、この分では五十ぐらいわけないな」

「うんお茶のこさいさいさ、一日に百ずつ運ぶことにきめようじゃないか」

「いいとも、百にきめよう、二人で百ずつ運べば、一月たてば六千になる、一年では、えーと七万二千だ、ぼくが高等科を卒業するまでには山ができるよ」

「ぼくは学校を卒業して、青年団に入ってからもやるつもりだ」

「ぼくだってやるさ、おじいさんになつてもやめないつもりだ」

耳や頬を赤くそめながら、一生懸命石運びに精を出しているのです。

二人とも、さきの浸水に、町の人たちとともに、恐ろしい一夜を体験した少年ですが、健気にも、町のために防波堤を築こうと思ひ立ち、冬休みになると、さっそく実行に移したのです。

通りがかりの漁師たちは

「おい、福松に庄一、何をしているんだ」

「ぼくたちはね、ここに波止をこさえるんだよ」

「ハハ・・・馬鹿なことをするなよ、そんなことおまえたちにできてたまるか」
ただ笑って行き過ぎるのでした。

二 袖石の由来

午後の授業が終わって、児童が帰えると、急に校内はひっそりとなります。先生方はその中で今日の後始末や、明日の準備をすませて、一人二人と帰って行かれます。

六年担任の飯田先生も用事をすませて、自転車で学校を出ました。先生のお宅は飯岡から一里ばかり西の足川という所です。ふだんは田んぼの中の県道を往復するのですが、干潮のときは浜づたいがずっと近道でした。

ちようどその日も引潮で、先生が竜王岬を曲がろうとすると、

「先生、先生！」

と、呼ぶ声がありました。寒々とした引潮の海を背に、二人の児童が大きな石をかついで立っているのです。先生は、漬物石でも拾いに来たのだろうと思いつながら、自転車から会釈しただけで、そのまま行ってしまいました。ところが、翌日もその翌日も、石をかついだ二人が、先生を呼ぶのです。毎日のことなので不思議に思われた飯田先生は、自転車からおりて

「君たちは、毎日石を拾ってどうするのだね？」
と、たずねました。

「先生、ぼくたちは波止を築くんです」

と、丸山少年が答えました。

「波止？、防波堤のことかね」

「はい、そうです」

若松少年もそばにやってきて、積みあげた石の山を指さしながら、

「先生、もうあんなに高くなりました。昨日計算してみたら、ぼくたちが高等科を卒業するまでには十一メートルの石の山ができる計算です」

「ふーむ」

その時、丸山少年がかついでいた石を、どっかりとそばに置くと、その石に腰をかけたがら、

「学校を卒業するまでに十一メートル、徴兵検査までには幾ばくなりや」

と算術の問題のようなことをいって、若松少年を笑わせましたが、飯田先生はとても笑う気にはなれません。じつと石の山を見つめた目を二人にうつすと

「いったい、誰が考え出したんだね」

と聞かれました。

「はい、若松君です」

丸山少年がいうと、若松少年ははにかみながら

「ぼくが考えたわけではありません。おじいさんから『袖石』という話を聞いたのです」

この町は、昔から波に削られていたのですが、その頃の町の人たちは、よそへ行くと袖にひとつずつ石を入れて帰り、ここに積み重ねたそうです。ひとつぐらいでは何でもないけれど、たくさんの人が二十年も三十年も根気よく続けていたので、しまいには立派な波止が出来て、大波が寄せてもびくともしなかつたそうです。

「だから、ぼくもそれをまねようと思って、丸山君に相談して始めたのです。冬休み中は五、六時間ずつやりましたが、今は学校から帰って一時間ずつやっています。」

「ふーむ。すばらしいことを始めたものだね。」

「明日から、戸木君も手伝うことになっています。」

「そうか、では今日は、ぼくも手伝おう」

「えっ先生も一緒に、うれしいなあ丸山君」

「仲間がふえて万歳、先生万歳」

飯田先生は外とうをぬいで、二人の少年の仲間に入って、石運びをされるのでした。

三 飯岡の児童は飯岡の大人に

翌日の昼休み、飯田先生は二人の少年のことを校長先生に話されました。

鈴木保司校長は、うなずきながら聞いておられました。ややたってから

「実は、あの海岸にはかねてから護岸工事の計画もあるのですが、何しろ莫大な金がかかるので、長い間ゆき悩んでいるのです。それにしても、子どもというものは、実に大人の想像も及ばぬことを平気でやるものですね」

「まったく子どもは、思いたったらどんな難しいことでもすぐ実行するのですからねえ」
「しかし、その単純な児童の知恵に、われわれ大人は教えられることがしばしばです。今度も、その話を聞いて思いつきました。これは二人の少年に任せておかず、学校全体の仕事とすべきでした。袖石の話は町の誰でも知っていることですが、ただ工事費のことばかりに苦労して、こんな単純なことに思い至らなかったのです。今からでも遅くはない『袖石』のように全校児童が、総がかりでやったら、遠からず立派な防波堤が出来ますよ」

力強くいつてから校長先生は

「さっそくわたしは町役場に行つて相談をしますよ」
とおっしゃいました。

鈴木校長は「飯岡の児童は、やがて飯岡の大人になるのだから、町を愛する心を養つておかねばならぬ」というのが、かねてからの教育方針でした。

役場に出かけて、その話をされると、もちろん役場も大賛成で、校長先生は、いよいよ決心され、翌日全校児童を集めて、若松君と丸山君の善行を褒め讃えました。そして

「昨年十二月の浸水さわぎは、皆さんもまだ覚えていますね。あのような恐ろしいことが、再び起こらないように、この海岸に波止を築いてどんな大波が寄せても、びくともしないものになりたい。皆さんはまだ子どもではあるが、自分の生まれた土地を住み心地のよい町にするために、これから若松君、丸山君と心をあわせて、体操の時間には、海岸に出て波止をこさえることにしましょう。尋常三年生までは、まだ小さいから今年はやりませんが、四年生になったらやることに決めます。そして、十年でも二十年でもかけて、この学校の手でりっぱな波止を築き、飯岡町の不安を取り除きましょう」

そして校長先生は『我らの波止』と書いた立札を、石積みの一角に立てたのでした。『我らの波止』それは、児童の愛郷心を、いやがうえにもひきだす力強い標語でした。

児童も先生も一生懸命の有様が、眼に見えるようではありませんか。子どもながら大勢の力は偉大なもので、五月までに築かれた石の山は『我らの波止』の立札よりも、四メートルほども高くなりました。

この働きを見た飯岡役場は、児童の仕事を助けるために、運搬用の蛇かごを二十個寄付したのをはじめ、さまざまな便宜をはかってくれましたが、それより更に嬉しいことが、みんなを踊りあがらせました。

五月十日、飯岡町を訪れた横山正千葉県内務部長は、児童の健気な作業を見て大いに感動し、お帰りなつて間もなく、この海岸の護岸工事を千葉県の事業として行うという知らせが届いたのです。

それにしても、たった二人の少年の、町を愛する一念が、学校全体の活動となり、大人を感動させ、ついに県の事業となったということは、なんと素晴らしい、美しい話ではありませんか。